The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヴェーダ語の名詞mitrá-「同盟；同盟者；ミトラ神」を巡って ： ある述語構文の解釈を中心に
Author(s)	都築, みのり
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 7, p. 7-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91171
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヴェーダ語の名詞 *mitrá-*「同盟；同盟者；ミトラ神」を巡って
――ある述語構文の解釈を中心に――

インド学・仏教学　博士後期課程 1 年
都築　みのり

はじめに

古代インドの言語であるサンスクリット語の名詞 *mitrá-*は，その最古層方言であるヴェーダ語（前 1200 年～）から見られる語である。中性名詞としては「同盟」，男性名詞としてはそれに参画する「同盟者」，またはそれを司る神「ミトラ」を表す。後の仏教では派生語である慈悲の慈（*mettā-*）が重要概念として用いられ，またヴェーダ語と同じインド・ヨーロッパ語族において，特に近い方言関係にある古イラン語には同源・同概念である言葉 *miθra-*（ミスラ）が現れるなど，*mitrá-*は古代からインドにおいて宗教的・文化的重要概念であった。一方で *mitrá-*の語義を詳細に表す記述やミトラ神の性質を明確に示すような記述は少なく，研究には非常な困難が伴う。多角的な用例検討が必要となる中，筆者が注目したのが *mitrá-*を用いた特殊な述語構文 *mitrám bhū/as* である。その用例を言語学的・文献学的に分析することにより，本構文の意味を特定するとともに，長年の文法的議論にも解決の糸口を与え，そこから *mitrá-*の持つ文化的含意についてもより深い理解を得ることが可能と思われる。

1.　*idám bhū* 構文とは（概要と先行研究）

一般に，*idám bhū* 構文と呼ばれる表現がある。これは，

名詞 A（主格主語）＋中性名詞 B（主格／対格）＋動詞 *bhū/as*「～になる／である」

からなる述語構文を指す。その名の由来となった代表例 *idám bhū* では，主格主語として人が立ち，*idám* は「これ（＝この地上世界）」の主格（述語）または対格（目的語格）である。この構文は「誰かが（主語）ここ（地上世界）［の支配権］[1]を手中に収める／めている」を意味すると理解されるが，問題は，構造的にも意味的にも，通常の述語名詞文（「A が B になる／である」）とは考えがたい点である。その際，最も重要なのは，中性名詞 *idám* が主格なのか対格なのかという点である。ヴェーダ語の中性名詞は主格と対格の曲用形が同じ形になることから，動詞 *bhū/as* がコピュラであり，上記の特殊な意味があくまで主語＝述語（主格）の意味関係から発展したものと考えるのか（cf. ♪

[1] この意味は，*idam bhū* が *rāṣṭram bhū*「支配権を手中に収める」の代替表現または省略表現として用いられるという事実に負うところが大きい。Hoffmann（1976: 557-559）を参照。

We are the world），それとも動詞の意味や格形に他の可能性（対格や副詞）を想定すべきなのかが，議論の焦点となってきた。

idám bhū 構文が広く知られるきっかけを作った Hoffmann（1976: 557-559）は，*bhū* と同じ構文を取る *as* が通常名詞述語文を構成することから，*idám* は主格述語であると結論づけた。一方近年，後藤（2007: 809-805）; Gotō（2008: 115-125）は，本構文の用例が事実上中性名詞との結合に限られることや, 名詞述語文であれば必須となる述語名詞と動詞 *bhū/as* との数の不一致に触れた上で，*idám* が Inhaltsakkusativ[2]「内容の対格」である可能性を指摘する。つまり *idam*（に相当する語）を，*bhū/as* 本来の意味「生じる」／「存在する」の具体的なあり方を表す対格として理解し，「その存在が〜によって特徴づけられる状態である／になる」を原義としたのである。後藤／Gotō が同論文にて，本構文には社会制度関係の中性一般名詞が用いられ，*mitrá-*もその一つであると指摘したことは本論にとって意義深い。

*mitrá-*が *idám bhū* 構文において使われる，すなわち *mitrám bhū/as* という形が見つかっているが，これまでの研究では，そもそも *mitrám bhū/as* を特殊な表現として想定している研究はほとんどなかった。多くの先行訳や先行研究では，単なる名詞述語文として考えられていたからである[3]。Gotō（2008: 118）は，実際に *mitrám as* の形が現れる Taittirīya-Saṁhitā II 5,2,5–6（本稿用例②）を例として挙げている。しかし，その意味の現れ方や用例の全貌については手つかずである。そこで筆者は，構文の可能性が疑われる例を網羅的に収集・検討した。以下では典型的な用例を挙げた上で *mitrám bhū/as* の意味を論じ，本研究結果をまとめたい。

2. *mitrám bhū/as* の用例検討，及びその具体的意味

ここでは，上に示した *mitrám bhū/as* の *idám bhū* 構文としての構造理解，ならびにその意味を端的に証言する用例を確認する[4]。

① Atharvaveda（Śaunaka-recension）XIX 15,6「安全と繁栄の為の章」

６：同盟者から安全が〔あれ〕。敵から安全が〔あれ〕。知っている者から安全が〔あれ〕。遠く離れている者から安全が〔あれ〕。夜にも我々の安全が，昼にも我々の安全が〔あれ〕。全ての諸領域は私との同盟に属するものになれ（*sárvā áśā máma* ***mitráṃ bhavantu***）。

①は，Gotō（1999: 137-138）が指摘した，*idám*（に当たる名詞）と動詞 *bhū/as* の数が一致しない現象が，*mitrám bhū/as* においても確認出来る用例である。中性名詞単数主

[2]「内容の対格」とは，典型的には同族目的語によって表されるような，動詞の意味内容そのものを具体化・限定して表示する機能の対格のことであり，「楽しい人生を／夢を／悲しみを生きる」のような言い方に相当する。ヴェーダ語ではその使用が広く見られる。。

[3] 例えばミトラを含めアーディティヤ神群の性質について研究を行った Brereton（1981: 57）などは，構文に合致する可能性が考えられる箇所において単に「ミトラはすべての者の友人だからだ」と *mitrám* を男性名詞の主格述語 *mitráḥ* であるかのように訳している。

[4] 以下では訳語の説明に（ ）を，訳の補いに〔 〕を使用する。

格／対格または男性名詞単数対格 *mitrám* に対し，動詞は命令法三人称複数形 *bhavantu* が用いられており，通常の名詞述語文とは考え難い。また，意味においても主語＝中性名詞 *mitrá-*（「全ての諸領域が同盟関係（そのもの）である？」）が成り立ちがたく，収集した用例すべてにおいてこの意味上の不一致が見られる。これらから，*mitrám* は主格述語ではなく，中性名詞単数対格の「内容の対格」と考えられ，*mitrám bhū/as* は「同盟によって特徴づけられる状態＝同盟に属する状態になる／である」を意味するとして理解するのが最も適当であると結論づけられる[5]。

② Taittirīya- Saṁhitā VI 4,8,1-2「ソーマ祭本祭，朝の圧搾の章『ミトラ・ヴァルナ両神への献杯』」[6]

神々はミトラに言った。「王であるソーマを我々は打ち殺そうじゃないか」と。彼は言った。「私はしない，なぜならば私はすべての者との同盟に属しているからだ（*sárvasya vā́ aháṃ* ***mitrám asmi***）」と。そういう彼に彼らは言った。「それでも，私たちは打ち殺そうじゃないか」と。彼は言った。「私は望みを選ぼう，他ならぬ乳によって，私の為にのソーマを彼らは完全な状態にするべし」と。それ故に，ミトラとヴァルナに属する〔ソーマ〕を乳によって彼らは完全な状態にする。。そういう彼から，家畜たちは歩み去った。「ミトラ（同盟者）であるのに，彼は残酷なことをおこなったぞ（***mitráḥ sán*** *krūrám akar*）」と（言って）。

③ Śatapatha-Brāhmaṇa（Mādhyandina-recension） IV 1,4,8「（用例②と同様）」

ソーマはヴリトラ（蛇の魔物）であったのだ。彼を神々が殺したその時，そういうミトラに彼らは言った。「お前もまた打ち殺すのだ」と。彼は望まなかった。「私はすべての者との同盟に属しているのだ（*sárvasya vā́ aháṃ* ***mitrám asmi***）。同盟に属しているのだから，私はミトラでないもの（敵）となることはないだろう（*ná* ***mitráṃ sánn*** *amítro bhaviṣyāmi*）」と。「そういう（そうすれば）お前を，我々は祭式から排除しよう」と〔神々は言った〕。「私もまた打ち殺す」と，彼（ミトラ）は言った。そういう彼から，家畜たちは歩み去った。「同盟に属しているのに，彼はミトラでない者（敵）になってしまったぞ（***mitráṃ sánn*** *amítro 'bhūt*）」と。

②，③は姉妹学派のパラレル箇所であり，神々によるソーマ殺しにミトラが参加させられ，その結果家畜を失う，という話が展開される。②では，一番最初のミトラの言葉においては中性名詞単数対格 *mitrám* を用いた *idám bhū* 構文が使われている一方，家畜たちの言葉では男性名詞単数主格 *mitráḥ*「同盟者」による通常の名詞述語文となってい

[5] 後藤（2007: 807）; Gotō（2008: 121）はヴェーダ語でしばしば中性名詞単数対格が副詞として用いられることから，*idám bhū* 構文の *idám* 等においてもその可能性は否定出来ないと書き添えている。一方，*mitrá-*に関しては明確に副詞として扱われている用例は見つかっておらず，「内容の対格」である可能性が非常に高い。

[6] ソーマ祭は，覚醒・興奮作用のある植物ソーマを朝昼晩三回圧搾し神々へ献供することを中心とする祭式。

る。一方③では，ミトラの言葉も家畜たちの言葉も *idám bhū* 構文が用いられている。ここから，*mitrám bhū/as* は通常の名詞述語文 *mitráḥ bhū/as*「同盟者となる／である」と同様の意味を表すと考えられる。筆者がヴェーダ語の用例を網羅的に検討した結果，全ての用例において，*mitráḥ bhū/as* は「A（主語）が（誰かとの）同盟に属する状態になる／である」ことを意味すると結論付けられた。加えてこれらの用例からは「同盟 *mitrá-* に属する」の内容も読み取ることが出来る。ここではミトラが，全てのものとの同盟に属していたにも関わらずソーマを殺したことで貴重な財産である家畜たちに歩み去られている。つまり，*mitrá-* に属している者は同盟相手を殺したり傷つけたりしてはいけないということが前提にあると考えられる。実際 *mitrá-* と「傷つけないこと」が関連付けられる用例は，*mitrám bhū/as* の用例中半数以上にのぼる。古代インドの同盟においては，積極的な援助や連携よりも，傷つけないということが極めて重要な要素であったことがここから知られる。

3. おわりに

mitrá- も *idám bhū* 構文に用いられることが先行研究によって指摘されており，筆者はこれを受け， *mitrá-* を用いる同構文 *mitrám bhū/as* の用例をヴェーダ文献から網羅的に収集し，その意味や用法を検討した。その結果，*mitrám bhū/as* は「A（主語）が（誰かとの）同盟に属する状態である／になる」を意味すること，そして長年議論されてきた中性名詞の格についても，これが対格として理解されるべきであるという近年の研究結果を再確認するに至った。またこの研究を通して，一般名詞 *mitrá-* には，「同盟・契約相手を傷つけないこと」が含意されているということも明らかになった。

参考文献

Brereton, Joel P. *The Ṛgvedic Ādityas* (American oriental series vol. 63). Connecticut: American Oriental Society. 1981.

Gotō, Toshifumi. “Reisekarren und das Wohnen in der Hütte: *śālám as* im Śatapatha-Brāhmaṇa” In L. Kulikov, M. Rusanov ed., *Indologica: T. Ya. Elizarenkova Memorial Volume*. Book 1. Moscow: Izd-vo RGGU. 2008: 115-125.

Hoffmann, Karl. *Aufsätze zur Indoiranistik. Herausgegeben von Johanna Narten*. Band 2. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag. 1976

後藤敏文「荷車と小屋住まい: ŚB *śālám as*」『印度学仏教学研究』55-2. 2007: 809-805.